

問一

愛という言葉は、日本では不義のニュアンスが強く、清純な意味を含まないのに対し、西洋では好むと同じ意味で捉えており、切支丹が神やキリストの愛を日本語で説く際に、愛という語が使えず、苦心して「大切」という語の発明に至ったということ。

問二

一語の使い分けで物事を簡明瞭に区別する日本語の利点、物自体の深い機微、独特な個性的な諸表象の見逃しと、物自体に即して正確に表現を考えることの軽視につながるという懸念。

問三

ほんとうのことは不変の、あたり前の事実であるだけで、それ以上の意味を含まず、ただ勝手にそうすればいいだけのことであり、素朴な、特に言葉で表現する必要のないことにすぎないから。

問四

恋愛は本能の世界から文化の世界へ引き出し、個人の努力で作るところに問題があり、その心情には無数の差がある。恋愛について考え、小説を書く意味は、それ自体に即した正確な表現を考え、自分自身が自分自身だけの解答を探し続けることにある。

問一

問二

「共生」という語が、人が自然と共に生きることを主張する言葉として繰り返し使用されることで権威化し、その主張が確約する価値が当然のものと人々に広く承認されているということ。

問二

「人と自然との共生」の句は、人の生に不可欠な自然という事実の確認から、多様な可能性を持つ人間に特定の選択と価値を不可避的に承認させる要請へと転じる仕組みを持つということ。

問三

ある語が、主張として繰り返し返され権威化する場合、事実の確認と特定の選択や価値の不可避的承認要請との間には論理の飛躍があり、言葉の観念的理解による多様な可能性の存在を曖昧に示唆するだけで、具体的実践を示すわけではないということ。



問一 何かにつけて世の中が不確かで、この身がはかないことをばかり思うので、その時その時につけて、日常の振る舞いまで、極楽往生できるか心配なことが多く感じられる

問二 この世の無常の道理も、言葉でどう説明するかは重要ではなく、わずかであっても関心を常に持つてはじめて理解することができるものであるということ。

問三 極楽往生を願う者は、毎日の住居についても、旅先でのように一晩だけのものであっても終生の住居ではないと、世の無常を常に意識しているということ。